

編集後記

二村 聡 福岡大学医学部病理学講座

まず、本号の読後の印象はいかがですか。読者諸兄諸姉のなかには、いったいどこが稀有な疾患なのかとあきれ果てた方、言われてみれば確かに稀有な疾患ばかりだと思われた方、あるいは、自分が担当していたならそのようなアプローチはしないだろうと思われた方、もっとましな特集はないのかと不満を感じた方もいらっしゃるでしょう。

タイトルに“知っておきたい…”とわざわざ付けた真の理由は、消化管疾患診療を標榜する限り、せめて、この程度は把握していただきたいという願いからです。本号に掲載された疾患は、この道数十年のベテランにとっては、さほど珍しくないかもしれませんが、消化管疾患診療に従事して間もない若手にとっては、未経験のものも数多く含まれていると推察されます。

臓器を問わず、遭遇・発生頻度の低い疾患を正しく診断するためには、自分で経験しておくことが第一の要件ですが、やはり、その種類は限られます。それゆえに、自施設や地域の症例検討会に参加したり、学会誌の症例報告を読み込んだりしながら、稀有な疾患の臨床病理学的特徴を丁寧に理解するしか方法はありません。今回、その理解に少しでも役立つように、稀有な胃疾患の概念・定義、形態的特徴、診断の要点を本誌で纏めてみようという合意に至り、本号が企画されました。そもそも稀有な胃疾患とは何かという議論を重ね、赤松泰次氏、小澤俊文氏、小生(二村聡)の3名で企画案を練りました。当初、3名の企画案は全く方向性が異なっていたのですが、議論するうちに一定の方向に収束しました。この“稀有な胃疾患”に対する見解は、赤松氏の序説と主題論文を参照してください。

小生が申し上げるまでもなく、与えられた紙幅で稀有な胃疾患のすべてを網羅することは不可能です。そこで、これまで早期胃癌研究会で提示されてきた比較的稀有な胃疾患を中心に収集・掲載しました。先に述べたように、ベテランにとっては稀有とは感じられない疾患もあると思いますが、提示された画像を丁寧にみれば、また、どのような思考過程で最終診断にたどり着いたのかを読み解いていただきたいと願っています。加えて昨年、満を持して

刊行された「胃と腸アトラスI 上部消化管」「胃と腸アトラスII 下部消化管」(医学書院)と併読すれば、各疾患の理解がより深化すると考えています。

若手の方々には、各疾患の特徴の表現・記述方法にも是非注目していただきたいと思います。医学用語・術語を適切に用いて、端的に表現する術は、優れた症例報告から学ぶことができます。そのよき手本となる文章を本号の主題症例から探していただきたいと願っています。きっと共感できる文章が見つかると思っています。ちなみに小生は、本誌に掲載された画像のひとつひとつを眺め、執筆者の苦心の跡(時に息づかい)を感じ取り、共感を得るように努めています。もちろん批判的に読むこともあります。誤解を恐れずに申し上げると、本誌の読者と各執筆者は潜在的な緊張関係にあるべきです。そうすることにより、疾患に対する理解はいつそう深まり、ひいては日常診療の質も向上すると期待されるからです。

本誌は刊行以来、臨床画像所見と病理学的所見の対比・検討による診断能力の向上を目指してきました。この信念が、一寸もぶれることなく本誌の掲載論文に反映されているか点検する必要があります。この点検作業には勇気と謙虚さが必要です。

適正な検閲がなされていない妙な情報が氾濫している昨今だからこそ、今一度、形態診断学の基本に立ち返り、稀有な胃疾患の理解を深めていただきたいと心から願っています。また、画像では診断が付かないから、取りあえず生検してみました…といった、まるで病理医に丸投げとも言える風潮に対して内省する必要もあるかもしれません。そして、本誌としては、やや挑戦的な企画であったこの“知っておきたい”シリーズ第1弾に対する皆さまからのご批正を請う所存です。個人的には、症例特集号では企画委員による厳正な査読と臨床・病理概評執筆を励行したほうがよいと感じました…。これは今後の検討課題といたします。

最後に、美しい臨床画像と病理標本が揃った貴重な症例を厳選し、提供して下さった執筆者と病理医に厚く御礼申し上げます。